OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「この詩によって君の命も永らえる」 : BaumgartnerにPaul Austerの「晩年のスタイル」の一片を探る
Author(s)	中村, 瑞樹
Citation	大阪大学英米研究. 2026, 50, p. 21-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「この詩によって君の命も永らえる」

―*Baumgartner* に Paul Auster の「晩年のスタイル」の一片を探る―

中村　瑞樹

Auster の後期作品群を眺めるための転換点

近年の日本におけるアメリカ文学研究では、山本裕子『フォークナーの晩年様式（レイト・スタイル）－その展開と変容』（松籟社、2023）や高野泰志編『ヘミングウェイと老い』（松籟社、2013）、金澤哲編『アメリカ文学における「老い」の政治学』（松柏社、2012）などがその好例となるように、作家の老いや「晩年のスタイル」に着目する文学研究の有用性が示されてきた。本稿は、これらの研究成果に倣い、2024 年 4 月 30 日に死去した Paul Auster に「晩年のスタイル」があるのか、あるとしたらそれはいかなるものか？という問いを出発点に、彼の最終作となった *Baumgartner*（2023）を導きの糸として考察を試みるものである。

Auster の訃報に触れ、*Literary Hub* のウェブページには“Remembering Paul Auster”と題された追悼ページが作成されたり、日本でも『ユリイカ』2024 年 8 月号が Auster 追悼号として出版されたりと、彼の死は文芸界に広く反響を及ぼした。一方で、今や彼のキャリアの始点と終点が明らかとなり、「オースター研究が新たな展開を見せることが期待できる」（近藤　55）ようにもなった。こうした状況を踏まえ本稿は、ケーススタディーとして最終作 *Baumgartner* を読み解くことで、今後発展するであろう「Auster の後期作品研究」、もしくは、Auster にとっての「晩年のスタイル」をめぐる議論に向けた足掛かりとなることを目的としたい。

なお、先ほど、「Auster の後期作品」という表現を使用したが、これはあくまで便宜上の表現に過ぎず、何をもってして Auster の後期作品とするかについて、未だ共通認識があるとは言い難いことは付け加えておく必要がある。分類例を挙げるとすれば、例えば大宮勘一郎は 2014 年の小論「ポール・オースターの系譜学」において、*The Book of Illusions*（2002）から *Sunset Park*（2010）までを中期と捉えている。一方で、本稿でも後ほどその可能性を示唆するように、Auster のキャリアを区切るポイントは他にも設定されうる。加えて、そもそも Auster のキャリアを初期・中期・後期という 3 つの分類に落とし込むことの妥当性についても更なる議論が必要であろう。このように、Auster の作家キャリアの分類は決して容易い作業ではないため、本論では議論の範囲外とし、まずは、いかなる分類法を用いたとて「後期作品」あるいは「晩年の作品」としてカテゴライズされる *Baumgartner* を読解することで、本論の目的を果たすことを優先することとしたい。

ここではまず、いかなる要素が *Baumgartner* を Auster の「晩年の作品」たらしめるのか、という後半での議論への足掛かりとして、2002 年頃と 2009 年頃の Auster の経験を取り上げておきたい。というのも、これらの時期の出来事は、彼の以後の作品群の執筆に大きな影響を与える重要な転換点だったと言えるほど、*Baumgartner* を含む各作品に頻出するモチーフを提供したと考えられるからである。

第一に、2002 年 8 月に妻、娘、愛犬の乗る車で自動車事故を起こしたことが、彼のその後の執筆に大きな影響を与えたことを確認しておきたい。Auster は、事故の一因として、自身が長年優良運転者だったことから生じた驕りがあったと振り返っているが（*Winter* 18）、一方で、彼自身も認めるように、そもそも彼の人生にとって、この事故に先立つ 2000 年から 2002 年にかけては、負の出来事が連続した辛い時期でもあった。ここでは、2012 年出版の自伝的考察である *Winter Journal* から、彼が事故の原因について考察する部分を取り上げ、この時期の彼の苦労を概観しておきたい。

> this is 2002, and so many things have happened to you in this year of grim surprises . . . . Your mother's death worst of all, but there was also the blood clot that formed in your left leg . . . not to speak of the trouble you have been having with your eyes . . . . A six-month siege of *coach leg,* then, and a chronic case of *dry eye,* and also the first full-blown panic attack of your life, which occurred just two days after your mother's death . . . [and you] are rapidly turning into a debilitated wreck.（19-21）

ここでは、自動車事故の直接的原因となった急なハンドル操作をした遠因と考えられる、2002 年に彼を襲った出来事として、彼の母親の死、エコノミー症候群とその予後の悪化、ドライアイ、そして母の死の衝撃によるパニック障害の発作などが挙げられており、こうしたネガティブな体験を経た彼は“a debilitated wreck”に変わってしまった。言うなれば、彼はここで大きく老いたのである。そして極めつきは、不注意にも、彼は愛する家族の乗る車で事故を起こし、家族を命の危険にまで晒してしまったのである。幸い、誰も命に別状はなかったものの、母の死や自らの老いを通して生や死の問題を痛感していた当時の Auster の心境に鑑みれば、この自動車事故が彼に与えた影響の大きさは容易に想像がつく。

他にも、2000 年代初頭のアメリカの政情は、Auster にとって受け入れがたいものでもあった。2000 年の大統領選挙は彼にとって「盗まれた選挙」であり、Al Gore が大統領になっていれば、9/11 もイラク戦争もなかったとまで喝破し（LaGambina 193）、その政治観が *Man in the Dark*（2008）の創作に反映されていることはよく知られている。実際、この時期以降の Auster 作品では、*Sunset Park* や *Man in the Dark* に見られるように、アメリカの時事問題をリアルタイムで扱うプロットや、老人がこれまでの来し方を振り返るプロットなどが中心となっていき、以前の Auster 作品の随所で見られた若者のアイデンティティの探求や転落のモチーフといったおなじみのテーマの一部は鳴りを潜めることとなる。

このように、2000 年代初頭の“a debilitated wreck”としての老いの実感、そして、当時のアメリカ政情は、彼の作家としての余生を形作るうえで重要な位置を占める要素と言って差し支えないだろう。そして、本稿後半で詳述するように、彼が起こした自動車事故での教訓は *Baumgartner* のプロットを読み解くうえでも必須要素となるのである。

次に、もう 1 つ考えておきたい時期として、Auster が自身の「晩年のスタイル」を意識し始めたであろう時期を取り上げておきたい。文学史に詳しい Auster であるから、自身に先立つ作家たちの晩年の特徴について、ある程度の知識を早い時期から持っていたことは容易に想定できる。ただ、自身の「晩年のスタイル」を意識し始めるきっかけがあったとすれば、それは 2009 年 9 月頃だと考えられる。

Auster はこの時期、J. M. Coetzee と書簡をやり取りしており、それらは *Here and Now* として出版されている。そこには、Auster と Coetzee が「晩年のスタイル」について議論を交わす部分が含まれている。Coetzee は「晩年のスタイル」を“It is not uncommon for writers, as they age, to get impatient with the so-called poetry of language and go for a more stripped-down style”（88）と語るのだが、それに対する返信として Auster は、James Joyce など複数人の作家を例に、彼の考える「晩年のスタイル」の可能性について考察を披露する。

> Your reference to“late style”reminded me that I still haven't read Edward Said's book. . . . Tolstoy is a good example, but what about Joyce? . . . In any case, his is the only name that jumps out at me to contradict this［Coetzee's］theory. No, perhaps Henry James as well . . . . Other writers, perhaps most writers, strike me as fairly consistent from beginning to end－Fielding, Dickens, Nabokov, Conrad, Roth, Updike, fill in the blanks. Not Beckett, of course, and in parallel with the late Bach, think of the late Matisse and his spare and sinuous cutouts. More stripped down, less stripped

down, the same. Those are the three possibilities－which is to say, each person follows his or her own path.（91; underline mine）

2009 年段階の Auster は、多くの作家の晩年の特徴を振り返りながら、上記引用の下線部にあるように、作家が辿りうる 3 つの可能性に言及し、晩年のスタイルとは各作家に独自のものだという捉え方を述べている。続く書簡では、“I would appreciate your thoughts on the Adorno/Said notion of late style which, I confess, eludes me somewhat.”（95）と、実際に Edward Said の *On Late Style* に触れたものの、少し理解が難しいと明かしている。つまり、Said の著書でも理論的基盤として引用される Theodor W. Adorno の「ベートーヴェン晩年の様式」における「苦くて刺だらけで、ひたすら堪能するというわけにはいかない」（195）という芸術家の晩年の様相にまつわる議論や、Said が作家の有終の美を飾るような晩年の作品よりも興味が惹かれるという、作家の晩年における「不調和、不穏なまでの緊張、またとりわけ、逆らいつづける、ある種の意図的に非生産的な生産性」（28-29　傍点は原文による）について彼が展開する議論は、すぐさま Auster の考えと共鳴するようなものではなかったのである。

あいにく、Coetzee との書簡ではこれ以上「晩年のスタイル」に関する議論は展開されない。とはいえ、Said が Auster の大学院時代の指導教員であったことも考慮すると、Said の論考に触発され、Auster が自身の「晩年のスタイル」の在り方を意識したかもしれないと考えても、さほど的外れではないだろう。実際 Auster は、*Winter Journal* において、“You have entered the winter of your life.”（230）という言葉を締めくくりに用いることで、自身が人生の最終段階に突入したことを述べているように、2009 年に Said の論考に触れた後、老いた、あるいは、人生の最終段階に突入した作家として、自身の晩年性について考え始めていたとしてもなんら不思議ではない。

こうした Auster の老いや晩年への向き合い方は、2010 年出版の *Sunset Park* においてすでに反映されていると考えられる。例えば、Works Cited に

あげた内田論文や拙論は、*Sunset Park* にはそれ以前の作品に見られない、老いた Auster の特徴が反映されていると指摘している。実際、拙論が主張したように、2010 年以降に出版された作品のタイトルには、“sunset”や“winter”といったサイクルの終わりを暗示する語がよく使われるなど、*Sunset Park* を起点に、「終わり」がタイトルから暗示されていることにも一定の注意を払う価値があるように思われる（中村　46）。続く小説 *4321*（2017）はタイトルそのものがカウントダウンであることも、この流れを汲むものと言えるだろう。

もちろん、Auster は *Sunset Park* 以前に「老い」にまつわる小説を複数発表しているし、*Sunset Park* とその 1 作前の *Invisible* との間に顕著な変化があるわけではないため、「老い」をキーワードに、*Sunset Park* が彼のキャリアにおける分水嶺であるとまで言い切ることはできない。その一方で、ここまで述べてきたように、2009 年以降の彼の執筆活動は、何かの終わりを見据えたものに移ったと考えられる根拠は他にも存在する。

Sunset Park に続き、Auster は 2 作のエッセイを出版し、老人として自らの来し方を省察した。そして、70 歳の節目の 2017 年には小説 *4321* を上梓するに至る。*4321* は彼の最長小説だったため、彼の集大成とみなされるきらいがあった。一方で Auster 自身が、“As far as I know, no one has ever written a novel with this form”（qtd. in Laity）と、Archie Ferguson の物語が 4 種類並行するこの小説のスタイルの新規性を強調していたことは、「人生の最後の一時期に、彼らの仕事と思索が、いかにして新しい表現形式を獲得したのか。そうした作風を、わたしは晩年のスタイルと呼ぶことにしよう」（27）という Said の定義を地で行くかのようでもあった。その後出版した評伝 *Burning Boy: The Life and Work of Stephen Crane*（2021）も 700 ページを超える大作となるなど、枯渇することのない執筆意欲を見せつけることとなった。一方で、大宮勘一郎が、こうした 2 つの長編が続いたことについて「成熟や充実という側面もあったでしょうが、肯定的な言葉だけでは語り尽くせないものを感じて胸がざわめいた」と語るように、「書き尽くさなくて

はならない、というような切迫」(「対談」 1) を感じさせるこれらの大作は、彼に迫る死の影を否が応でも想起させるものでもあるという点で、*Sunset Park* に始まる、終わりを意識した作品の系譜に位置していると言えるだろう。

本論で扱う *Baumgartner* に関して大宮は、先述の切迫感から解放された印象があるとも述べている (「対談」1)。しかしながら、*Baumgartner* にもまた、人生の残り時間を意識した Auster が書き残すべきことを書き残せるうちに書き残そうとしたという姿勢が見いだせるとも言える。というのも、肺がんの症状に苦しみながら執筆された *Baumgartner* は、Auster が自分の寿命を意識しながら書いていた作品という意味で、他の作品とは一線を画すと考えられるからである。

実際、Auster 追悼ウェブページに寄せられた追悼文の多くは、Auster の晩年の執筆における奮闘を証言している。例えば、投稿者の一人 Frank Huyler は、闘病のかたわら *Baumgartner* を執筆していた Auster が作品の完成に向け奮闘していた時期を次のように振り返っている。

> Paul's last book, *Baumgartner,* was written when he was sick. He didn't know he had lung cancer, only that he was coughing and felt rotten. But the novel is revealing—it's about the end, and the struggles of the end. He drove himself to finish it, just as he drove himself so hard for most of his life . . . .

さらに、Andy Martino の追悼文は、2023 年 8 月頃には Auster が自身の死がすぐそこに迫っていることを認識していた証左ともなっている。

こうした背景を踏まえると、2009 年以降の流れの中で、*Baumgartner* の執筆中にもまた、Auster は自らの「老い」や「死」、「晩年のスタイル」といった点に自覚的であったと推察して差し支えないだろう。したがって、病に侵された逆境においてすら、最後の最後まで書き残すことを徹底した彼の姿勢の結晶として *Baumgartner* を捉え、いかにこの作品の中に Auster の「晩年

のスタイル」の構成要素と呼びうるものが組み込まれているかを読み解くことには、本作への理解を深めるのみならず、Auster の「晩年のスタイル」を俯瞰するための一片を得るポテンシャルがあると言えるだろう。

以下では、先述した Auster の伝記的背景を参照軸に用いながら、本作の主人公 Seymour Baumgartner が特に深い関わりを持つ 2 人の女性 Anna Blume と Beatrix Coen を議論の中心に据えることで、この 2 人の女性の人物造形にこそ、晩年の Auster 作品を特徴づける、彼が書き残したいメッセージが込められていることを論じていきたい。

詩人 Anna が登場する意義

Baumgartner の前半部分は、亡き妻 Anna の死を受け入れられない主人公 Baumgartner が彼女との記憶を回想するプロットが中心となっている。ここで、亡き妻の名前として Anna Blume が採用されたことは注目に値する。この Anna という名前は、Auster の読者にとって最も馴染み深いものと呼んでも過言ではない。彼女は、*In the Country of Last Things*（1987）の主人公であり、*The Travels in the Scriptorium*（2007）においては老人 Mr. Blank の献身的な世話を担う人物である。上田麻由子は、Anna の声は Auster 作品群を貫く声だったと述べている。

> オースターは自分のなかに傷を負っているからこそ「大人になってから生涯ずっと、紙の上に言葉を血のように流しつづけて過ごした」と、これまでひたすらに書きとおした日々を振り返っている。みずからに降りかかる老いさえも素材として書きつづけたオースターに『写字室の旅』で寄り添ったのはアンナという名の女性であり、また遺作となった『バームガートナー』では 70 代の主人公サイ（中略）は 10 年前に海の事故で亡くなった、「すべてを見通す」目を持った妻アンナの不在の苦しみを、幻肢痛、つまり四肢を失ったあとにまるでそれが存在するかの

ように感じる苦痛のようにひしひしと味わう日々のなかで、彼女の書いた言葉からその声が立ち上がってくるのを聞く。アンナの声は生涯オースターの耳元でやむことなく語りつづけたのだ。(141)

In the Country of Last Things が Auster の耳に聞こえてきた女性の声を具現化したものであることはよく知られているが(*Art* 319-320)[1]、上田の指摘にあるように、その声は Auster の耳元に生涯届き続けたようで、最終作 *Baumgartner* においても彼女は登場することとなった。

以下では、上田の指摘を踏まえ、次の 2 つに議論の的を絞り、Anna について掘り下げていくこととしたい。1 つめの論点として、傷を負った Auster に寄り添うのが Anna だった意義について考えながら、なぜ *Baumgartner* においても再度 Anna という名の女性が登場するのかを考えていきたい。そして、2 つめの論点として、*Baumgartner* において Seymour が死んだはずの Anna の声を聴くというシーンを取り上げ、Anna の存在意義をさらに検討してみたい。

まず、Auster が実際に負った傷については、本稿冒頭で指摘した通り、2002 年頃に受けたものの存在は大きい。ここで着目したいのが、*Winter Journal* で件の自動車事故について語る場面において、事故が起こる前から彼の異変に気付いていた妻 Siri Hustvedt の慧眼について多く言及されることである。

Today, however, she［Siri］senses that something is wrong, that you are not concentrating properly . . . . You should know better by now than to doubt the wisdom of your wife's words, for she possesses an uncanny ability to read the minds of others, . . . and again and again you have marveled at how accurate her instincts have proven to be . . . .(19)

この場面に限らず、心に傷を受けた Auster を現実世界で常に支えてきたの

は Siri であり、そんな彼女の存在が本作での Anna の人物造形に影響したと考えることは、短絡的な結びつけではあるものの、かといって完全に否定できるわけでもない。実際、Siri 自身が Auster に向けた追悼文の中で、“Paul isn’t Baumgartner, and I am not Anna, who never bothered to publish her work”（Hustvedt）と述べるように、Seymour と Anna は、Paul と Siri を再現した人物ではない[2]。とはいえ、Siri がこのように述べることは逆説的に、妻 Anna を“the girl with the brilliant, all-seeing eyes”（*Baumgartner* 24）と捉える Baumgartner から、自動車事故の描写で妻 Siri の慧眼について言及するような Auster の姿が透けて見えることを認める、つまり、この 2 つの夫婦関係がパラレルであるという読みの存在を裏付けているとも言える。Auster の Siri への尊敬は、彼が作品内に書き残しておきたい要素として選ばれ、それが Anna の人物造形に反映されているのだという捉え方には、一定の重みがあると言えるだろう。

こうした主張をさらに裏付ける例として、*Baumgartner* と *In the Country of Last Things* はともに、Siri の応援を受けて完成された作品としての共通項を持ってもいることを確認しておきたい。まず、*In the Country of Last Things* の完成において Siri の存在が不可欠だったことは、Larry McCaffery と Sinda Gregory との 1989 年のインタビューで次のように明言されている：“Still not sure of myself, I showed them to Siri . . . . She said those pages were the best work I had ever done and that I had to finish the book. I had to finish the book as a present to her”（*Art* 320）。

同様に、*Literary Hub* に掲載された Siri の追悼文は、彼女が闘病中の Paul に対して、この作品を完成させるよう背中を押したことを明らかにしている。

> While Paul was working on his last novel, *Baumgartner,* he began to suffer from fevers every afternoon. . . . It meant he had to stop working much earlier in the day than usual. As he read the book aloud to me in regular

> installments, he said over and over, “I have no idea what I’m doing.”. . . “Keep going,” I said, “I love it. Just keep going.”

この証言を踏まえると、*Baumgartner* は、Siri の声に応えるという使命感のもと、Auster が奮闘の末に上梓した作品であると呼んでも決して的外れではないだろう。さらに、この 2 作がともに Siri の声に応え完成されたのであれば、互いになんらかの影響関係があったとしても不思議ではない。ここからは、*In the Country of Last Things* で言及された Anna という名前が持つ象徴性が、*Baumgartner* の世界観にも影響を及ぼしていることを論じてみたい。

In the Country of Last Things において、主人公 Anna は Otto Frick という人物から、名前のスペリングが運びうる意味について、次のような言葉をかけられる。

> “My name is Otto. It go back and forth the same. It don’t end nowhere but begin again. I get to live twice that way, twice as long as no one else. You too, miss. You be named the same as me. A-n-n-a. Back and forth the same . . . . That’s why you got to be born again.”（133）

ここで Frick が、上から読んでも下から読んでも同じになる Otto と Anna という名前に存在する円環性を指摘していることは *Baumgartner* を読むうえでも示唆的である。まず、Anna という名前の持つ円環性は、藤井光の次の言葉と併せて考えると、議論が深まるように思われる。

> 『バームガートナー』はどうしても遺作だということを前提としてしまうところはあるのですが、詩人として出発したオースターが、詩人を配偶者とした男性の小説を最後に書き、その配偶者の書いた詩が創作として作中にも出てくるというのが驚きでした。オースターのキャリアとし

て円環が描かれるような、運命めいたものを強く感じました。（柴田、藤井　61-62）

In the Country of Last Things の構想は、Auster の作家デビューの前から存在していたものであり、上田の指摘にあったように、作家キャリアの初期から Anna の声は Auster の耳元に語りかけていた。この作家キャリア初期における伝記的背景に、最終作に詩人が登場することで Auster のキャリアに円環が描かれるという藤井の解釈を付け加えることは、Anna という名前に内在する円環性の意義を際立たせてもくれる。同様に、Anna という名は「終わることなく次が始まる」ことを含意していることも見逃すことができない。というのも、*Baumgartner* という作品は、書き残すことによって、物語が新たな形で継承される可能性を示す作品だからである。

この作品では、Auster 作品にしては珍しく、死んだはずの Anna と Baumgartner が電話で会話するというマジック・リアリズム的なシーンが挿入される。その中で、Anna は、生者と死者は、生き残った者が死者について語り続ける以上、繋がっていられるという主張をする：“. . . the one thing she does know is that the living and the dead are connected, . . . for if one dies before the other, the living one can keep the dead one going in a sort of temporary limbo between life and not-life . . .”（62）。Baumgartner は、作品を通して、Anna の自叙伝的エッセイである“Frankie Boyle”や“Spontaneous Combustion”などを読むだけでなく、彼女の詩群を読み直し新たなアンソロジーの編纂を考えるなど、彼女が書き残したものを読む機会が多く与えられている。こうしたシーンは、不慮の事故で亡くなった Anna に対する Baumgartner の弔いであるとともに、Anna の生き様を再度発掘することで、彼女を生き返らせることも意味する。当然、ここでの「生き返り」は比喩的な意味ではあるものの、彼女の書き残したテキストの存在ゆえその生き返りが可能になっており、さらに、そうした生き返りの可能性を述べる人物として Anna が造形されていることは特筆しておくべきだろう。

回線も繋がっていない古い電話に Anna から電話がかかってくるという夢のような体験を経た Baumgartner は、“Not a scientific truth, perhaps, not a verifiable truth, but an emotional truth, which in the long run is the only thing that counts”（64）と考えるに至り、結果として、この夢のような物語を信じるという“an emotional truth”をもとに、Anna の死に対して持っていたオブセッションからの解放の糸口を見出すことになる。ここに、Anna が詩人という書き残す人であったこと、そして、彼女の名前が円環を成すことの意味が重なり合うことになる。つまり、Anna という名前は、Auster からの敬愛する妻へのオマージュにとどまることなく、肉体の終わりとしての死を迎えようとも、残された書物や物語によってまた何かが始まりうる可能性を託された名前なのである。柴田元幸は『MONKEY』第 35 巻の「ポール・オースター全作品解説」に次の言葉をさりげなく載せている。「このオースター最後の作品の最後の一語は begins である」（146）と。

老人が恐れる不可逆性と大学院生の若気の至り

この小説では、Baumgartner が同僚の大学教員である Judith Feuer との late marriage に挑戦するものの失敗する、というコミカルなプロットが挿入された後[3]、作品終盤でもうひと捻りが加えられる。Anna の詩をもとに博士論文の執筆を検討している大学院生 Beatrix Coen の登場である。Anna の詩は発表されたアンソロジーが 1 つだけだったため、それだけでは博士論文の完成には足りないと考えた Beatrix は Baumgartner に手紙でコンタクトを取る。その手紙を受け取った Baumgartner の喜びは次のように描写されている。

> It was more than happiness, he realized, more than just a cause for celebration, but a feeling of destiny fulfilled, somehow, as if . . . Baumgartner had been waiting for such a letter, . . . hoping there was someone . . . who would care enough about what Anna had given the world

. . . .（170）

ここで述べられた喜びに起因する Baumgartner からの Beatrix への好感度は、彼が Beatrix とのコミュニケーションを重ねるにつれ、うなぎのぼりとなり、最終的には、“Baumgartner has already adopted her as his imaginary daughter and looks upon her as the second coming of his dead wife”（194）と語られるように、Beatrix を自身の娘と捉えるだけでなく、彼女に亡き妻の姿を投影するまでになる。亡き妻を想起させる女性を作品に登場させることは、Auster 作品にありがちなご都合主義の表出と否定的に捉えられるかもしれない。しかし、この若き大学院生こそ、晩年の Auster の若者表象において見逃せない存在なのである。

というのも、Baumgartner にとって、Beatrix が Anna の詩に興味を持っていることはもちろんのこと、彼女が Anna の詩について論文を書こうとしていることは大きな意味を持つからだ。現状、Baumgartner 以外に Anna の詩を管理している人物はおらず、かつ、彼らはともに不妊症であったことから、Baumgartner 亡き後には、Anna の詩が葬り去られてしまう可能性があった。しかし、Beatrix は養子のような立場として Anna の書き残した詩を受け継ぐだけでなく、彼女の論文等を通して、Anna の詩がより多くの読者を集める可能性までも切り開く存在となりうる。陳腐な表現ではあるが、Beatrix は、彼ら夫婦が生きた証をこの世に残す希望の星として重要な人物であることに変わりはないのだ。

ただ、より注意を払うべき点は、Baumgartner と Beatrix が直接出会うことなく本作が幕を閉じるということである。作中で描かれるのは Beatrix が Baumgartner を訪れるまでの打ち合わせの様子のみで、そこで際立つのは、彼女が住む Michigan から New Jersey までの自動車旅の道中を案じる老人の姿である。

There is a problem, however. . . . Michigan, Ohio, and Pennsylvania can be

> miserable places in early January, and . . . Lake Erie will dump one of its snowstorms . . . and turn those six hundred miles into one long danger zone. Then, there is her insistence on going solo . . . . Baumgartner suggests that she rethink her plan . . . , but Bebe contends she will need her car . . . .（192-193）

かつての Auster 作品であれば、以下に引用した *The Music of Chance* の結末のように、向こう見ずな若者の姿の描写が中心に据えられていたことだろう。

> There was no time to stop, no time to prevent what was going to happen, and so instead of slamming his foot on the brakes, he pressed down even harder on the gas. He could hear Murks and his son-in-law howling in the distance, but their voices were muffled, drowned out by the roar of blood in his head. And then the light was upon him, and Nashe shut his eyes, unable to look at it anymore.（198）

このフィナーレで対向車の光に向かってアクセルを踏み込んだ Nashe と、雪道を一人運転することへの自信を表明する Beatrix は、ともに若気の至りを表出する人物として結びつけられるかもしれない。ただやはり、*Baumgartner* では、*The Music of Chance* や *Moon Palace* などが描いてきた若さが生む疾走感よりも、心配性の老人の思考にフォーカスが置かれている。言うなれば、この作品が中心とするのは、「不可逆である死」が未来ある若者の前途を無意味に絶つことへの老人の恐怖なのである。

妻 Anna を水難事故で失った Baumgartner の後悔の根底にあるのは、彼女の死をリセットできないことへの無念さであることは言うまでもない。Auster 本人についても、先述の自動車事故での経験に加え、前途多望に見えた友人の娘が自殺したことに心を痛めたという実体験を *Sunset Park* に組み

込んでもいるように（*Sunset* 139）、若者の人生が道半ばで閉ざされてしまうことへの憂慮は、晩年大きくなっていたのだろう[4]。

小澤英実は、晩年の Auster について、次のように述べている。

> 晩年のオースターはもはや、死にむかうスワンダイブをとおして至高の芸術を追い求める断食芸人でも、真理を追い求めるあまり足場を失って社会から転落した生ける亡霊でもない。メタファーではなく文字通りテロリストが仕かけた落とし穴に落ち、タワーから墜落してこの世界から突如消えてしまった死者たち。9・11 はオースターを、墜落する存在から記憶を記録する小説家に変えた。（161）

Baumgartner においてもまた、死にむかうスワンダイブもなければ、対向車に向かってアクセルを踏み込む無謀な運転もない。本作の結末で Baumgartner は交通事故を起こすものの、これは鹿の飛び出しによるものであり、彼は軽いけがをするだけで、命に別状はないと描かれるところにも、Auster の自動車事故の経験の影を見て取れる。やはり、晩年の Auster が描くのは、生き残って新たな物語を伝えることの価値なのである。

さらに加えて言えば、晩年の Auster は、9/11 テロ、それに続くアメリカが関わった戦争、そして、目に見えない COVID-19 との戦いなど、21 世紀アメリカが立ち向かってきた戦いによって生じた不毛な死を多く眺めてもきた。Beatrix のアメリカ横断ドライブの道中が終始安全であるという保証は、分断が進む現代のアメリカに存在するとは断言しがたい。Beatrix の道中の無事を願うことは、広大なアメリカにおける冬の気象条件、地理的条件によるものだけでなく、21 世紀アメリカの社会情勢がもたらしうる不毛な死の例に Beatrix が含まれないでほしいという彼の願いでもあるのである。

したがって、Baumgartner が Beatrix に対して自動車旅はやめてほしいと望むことは、Anna の継承者として、また、未来ある若者としての Beatrix の存在価値を守りたいというだけにとどまらず、彼女の明るい未来を一瞬に

して奪い去りうる人間の不注意と不慮の外的要因への不安を拭いきれない様子の裏返しでもあるのだ。Anna の死に苛まれた過去志向の老人として捉えられがちな Baumgartner は、一方で、Beatrix という有望な若者の命の貴重さを見つめ、多くの経験を積んだ人生の先輩として未来志向な助言をしているとも言える。安易に登場人物と作家を結びつけることは慎むべきだが、それでも、この若者を案じる老人としての Baumgartner の姿に、晩年の Auster の姿を見出すことは決して難しくない。

まとめ－Auster 版 *Sonnets* としての *Baumgartner*

Baumgartner は Beatrix と電話や Zoom でのオンラインミーティングをしていた時の彼女の声に触れ、次のように思う。

> even the most ordinary words that come from her mouth are imbued with some mesmerizing, transcendent quality that makes them sound as important as a Shakespeare sonnet or the preamble to the Declaration of the Rights of Man. Anna had that quality as well . . . .（197）

ここで、Beatrix の言葉の比較対象として、Shakespeare のソネットが取り上げられているのは興味深い。というのも、*Baumgartner* は Auster 版 *Sonnets* と呼べるほど、この 2 作品は似たような目的のもと執筆されていると言えるからだ。Shakespeare の *Sonnets* の 1 番から 126 番にかけては、詩人が青年に向けての愛を様々な形で語り、序盤のソネットで詩人は、青年が結婚し、彼の美しさを引き継ぐ子どもを設けることを勧める。それは、その美がいつか失われうることを前提としてのことである。そんな詩人が老いや死への対抗策として振りかざすのが詩を後世に残すことだったことは、下に引用した 18 番のソネットの後半を引き合いに出すまでもないだろう。

By chance, or nature's changing course untrimmed;
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou ow'st;
Nor shall death brag thou wander'st in his shade
When in eternal lines to time thou grow'st:
So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.（qtd. in Duncan-Jones 147）

同様に、詩人 Anna、そして、Anna の詩を後世に継承する可能性を秘めた Beatrix という人物に着目することによって本稿が明らかにしてきたように、詩人として作家のキャリアをスタートさせた Auster が持つ、詩という後世へと物語を語り継ぐ媒体への信頼が *Baumgartner* の素地にある。そして、この最終作は、物語を通して Anna の声に代表される声を保存し、それが継承されることで新たな物語の 1 章が始まることへの希望を描いた。加えてこの作品は、老人 Baumgartner が魅了される、Beatrix の輝かしいまでの若さを保存するものであるとさえ言える。本稿が分析してきたとおり、こうした小さな物語を語り継ぐ文学の可能性を信じること、そして、こうした物語の継承者として未来を切り開くポテンシャルを持った若者への希望を描くこと。これらが Shakespeare の *Sonnets* さながらの *Baumgartner* の屋台骨となる、Auster が晩年書き残そうとした要素なのだろう。

山本裕子は William Faulkner の後期作品群を体系的に振り返りながら、彼のレイト・スタイルとは、「人生回顧と回想という過去を振りかえる二重の視点が用いられることにより、全体をかたちづくる伝記的な成長物語（ビルドゥングスロマン）と細部を構成する自伝的なエピソードとが融合した作品構造をもつ」とし、「この老年期における記憶作業を文学形式に転化した構造は、作品様式がフォークナー自身の老年期におけるアイデンティティの問題と根源的に繋がっていたことの証である」と結論づけている（211-212）。これに対し本論は、Auster の後期作品群を網羅するものではないため、山本ほどの結論を提示すること

はできないし、*Baumgartner* 執筆に先立つ Auster の自伝的背景に議論が偏っていたことは認めざるを得ない。

一方で、*Baumgartner* の中に Auster の晩年の作品様式の特徴を取り出すとすれば、それは詩を含む、Anna の著作の直接引用が複数組み込まれるという形式をもとに、彼女の生の声が保存されていることにあるのではないだろうか。というのも、Anna の著作がパラフレーズされることなく Anna の言葉として作中に引用されることで、本稿で論じてきたような、Auster が書き残そうとした文学への信頼を表現することや若さを記録することが可能になっているからである。したがって、Anna の詩“Lexicon”を掲載することで読者に詩の解釈を委ねたり、Anna の自叙伝を通して 1960 年代を若者として過ごした Anna の若さを読者に再確認させたりという手法は、Auster が晩年書き残したかった要素を記録するスタイルであるという点で、彼の「晩年のスタイル」を構成する一片と言えるのだろう。

なお、Auster はキャリアを通して、文学の可能性を信じていた作家であるし、アメリカに生きる若者の可能性を描いてきた作家でもあることから、本論が指摘してきた *Baumgartner* に見られる特徴は、厳密には彼の晩年のみに固有のものというわけでもないことは慌てて付け加えておきたい。とはいえ、国家の統一、安全が危機に瀕する 21 世紀アメリカを眺めてきた Auster が、若かりし頃の Auster とは違った心持ちで物語を合衆国に対して生み出してきたことも紛れもない事実である。本稿のまとめとして、*The Music of Chance* の結末について Auster が 1992 年の Mark Irwin とのインタビューにおいて語った言葉を比較対象として確認しておこう。

> Whether Nashe lives or dies is almost unimportant. The important thing is that he has triumphed. By the end of the book, he has transcended everything he had been－he’s become, I think, a great figure－a truly powerful human being who understands himself and what he’s capable of（which was not the case in the beginning）, and what this means is that he’s willing to take the

> world as it comes to him. . . . So whether the car crashes or whether he manages to elude the on-coming headlight, whether he dies or whether he lives is much less important than the inner victory he's won at that moment. (*Art* 332-333)

本稿が論じてきたように、*Baumgartner* の結末部が *The Music of Chance* の結末部を想起させようとも、自動車事故で家族を命の危機に晒した経験に加え、自らの死が目前に迫る状況で *Baumgartner* を執筆していた Auster が「Nashe の生死よりも、彼の内的な勝利がより重要なのだ」という趣旨の発言をするとは考えにくい。むしろ際立つのは、Beatrix を案ずる Baumgartner の様子であり、そして、軽い自動車事故を起こすものの、彼が生き延びることで本作が“the final chapter in the saga of S. T. Baumgartner begins”（202）という語りとともに幕を閉じることである。あくまで焦点は、生者として物語の主体でいることの価値と詩に代表される死者の言葉を生者が語り継ぐことで死者までもが生き永らえられる希望なのである。Auster には作家として一貫して持ち続けたスタンスも存在する一方で、本稿で論じてきたように、明らかに晩年に向けて彼は変化を経ており、そうした変化は *Baumgartner* の創作にも反映されているのである。

もちろん、本稿は Auster の晩年にまつわる一考に過ぎず、ましてや *Baumgartner* に登場する 2 人の女性に着目するのみでは、彼の「晩年のスタイル」を定義するには到底及ばない。今後は、Ed Papadopoulos といった他の登場人物や *4321* などの他の作品を分析することはもちろんのこと、過去のインタビューなども参照しながら、Auster の晩年に固有の要素のみならず、彼の生涯を通して変わらなかった要素なども含め、Auster の晩年の特徴をより精緻に研究していくことを課題としたい。ただ、少なくとも本稿は、始まったばかりの Auster 晩年研究の発展に向けた種を蒔くことはできたのではないだろうか。

附記

本稿は日本アメリカ文学会関西支部 2025 年度 6 月例会（於大阪大学豊中キャンパス、2025 年 6 月 14 日）で口頭発表を行った内容に加筆・修正を行ったものである。拙発表に対し質問・コメントをくださった先生方、司会をお引き受けいただいた神戸大学の平川和先生には、この場を借りてお礼申し上げたい。

また、筆者は 2025 年度後期に神戸市外国語大学外国語学部第 2 部英米学科 4 年生対象の「専攻英語Ⅳ講読（文学）」にて *Baumgartner* を講読課題図書としており、授業中のディスカッション内容からも本稿執筆への大きな刺激を受けた。毎週熱心に授業に向き合ってくれた受講生の皆さんにも厚く謝意を示したい。

注

1　インタビューの該当箇所は以下の通りである。

In many ways, writing that book［*In the Country of Last Things*］was like taking dictation. I *heard* her voice speaking to me－and that voice was utterly distinct from my own. . . . right when I was in the middle of *The New York Triology*［sic］. . . , she came back to me in full force, and I wrote the first thirty or forty pages as they stand now.（*Art* 319-320）

2　*Baumgartner* というタイトルの母音の配置が Paul Auster を想起させるなど、Baumgartner の人物造形の中に Auster の姿が見出せるような仕掛けが他にも存在することも事実である。その一方で、Chapter 3 の最後において、Judith へのプロポーズが失敗した Baumgartner について語り手は、“we will end the chapter with Baumgartner sitting at his desk”（103）と語るなど、メタフィクションの手法を用いて、あくまで Baumgartner はフィクション上の人物であることを強調しているなど、作品としても Baumgartner は Auster の化身ではないと主張しているようにも読める。

3　Said は『晩年のスタイル』の中で、「喜劇は、時宜に適わぬ行動にその材料を求める」とし、その一例として May-December couple のような「老人が若い女性に恋をすること」を挙げている（27）。ここでの Baumgartner の Judith への求婚の物語は、プロポーズのシミュレーションを重ねるも結果は全く計画通りならない彼の滑稽さを含むなど、どこかコミカルである。ここには、老いや晩年といった深刻なテーマを描く一方で、ユーモアを忘れない Auster の姿勢が示されているようにも思われる。

4　考えてみれば、Auster の 2002 年以降の作品には、事故によるけが人が多い。*Man in the Dark* の主人公 August Brill も交通事故でけがをし、車いす生活を送っ

ているし、*Baumgartner* の第 1 章でも、Baumgartner はやけどをした後、ベースメントで転倒してさらなるけがをしていたりする。さらに、*Baumgartner* の同じ章では、大工の Mr. Flores が、作業中に誤って指を切り落としてしまった、という知らせに対し、一瞬の不注意がもたらしうる最悪に対して Baumgartner が慄いている場面が挿入されてもいる（8-9）。

Works Cited

Auster, Paul. *The Art of Hunger: Essays, Prefaces, Interviews.* Penguin Books, 1997.

———. *Baumgartner.* Faber and Faber, 2023.

———. *In the Country of Last Things.* Faber and Faber, 1987.

———. *Man in the Dark.* Faber and Faber, 2008.

———. *The Music of Chance.* Faber and Faber, 1990.

———. *Sunset Park.* Faber and Faber, 2010.

———. *Winter Journal.* Faber and Faber, 2012.

Auster, Paul and J. M. Coetzee. *Here and Now: Letters 2008-2011.* Vintage Books, 2014.

Duncan-Jones, Katherine, editor. *Shakespeare's Sonnets.* Arden Shakespeare, 2010.

Hustvedt, Siri.“The Mechanics of Reality,”a reminiscence cited in“Remembering Paul Auster.”

Huyler, Frank. A reminiscence without a title, cited in“Remembering Paul Auster.”

LaGambina, Greg.“Interview: Paul Auster.”*Conversations with Paul Auster,* edited by James M. Hutchisson, UP of Mississippi, 2013, pp.193-197.

Laity, Paul.“Paul Auster: 'I'm going to speak out as often as I can, otherwise I can't live with myself.'”*The Guardian,* 20 Jan. 2017, www.theguardian.com/books/2017/jan/20/paul-auster-4321-interview. Accessed 30 Nov. 2025.

Martino, Andy. A reminiscence without a title, cited in“Remembering Paul Auster.”

“Remembering Paul Auster: 1947-2024.”*Literary Hub,* 28 May 2024, lithub.com/remembering-paul-auster. Accessed 11 Jun. 2025.

アドルノ、テオドール・W「ベートーヴェン晩年の様式」『ベートーヴェン－音楽の哲学』（大久保健治訳）作品社、1997 年、pp.195-201。

上田麻由子「ガラスの手荷物－シリ・ハストヴェットとともに『最後の物たちの国で』声を聞く」『ユリイカ』第 56 巻、第 10 号、2024 年 8 月、pp.135-143。

内田有紀「アメリカの翳り（サンセット）と持続する生の可能性－ポール・オースターの『サンセット・パーク』における老い」『アメリカン・ポエジーの水脈』（藤本雅樹監修、池末陽子、三宅一平編著）小鳥遊書房、2024 年、pp.193-209。

大宮勘一郎「ポール・オースターの系譜学－中期作品について」『れにくさ－現代文芸論研究室論集』第 5 巻、第 2 号、2014 年、pp.1-8。
小澤英実「ボディーズ・アンリミテッド－オースター作品における肉体考」『ユリイカ』第 56 巻、第 10 号、2024 年 8 月、pp.155-161。
近藤佑樹「爆破される自由の女神たち－ポール・オースター『リヴァイアサン』における 9.11 以前の国内テロ表象について」『大阪大学英米研究』第 49 号、2025 年、pp.41-57。
サイード、エドワード・W『晩年のスタイル』（大橋洋一訳）岩波書店、2007 年。
柴田稔彦『対訳シェイクスピア詩集－イギリス詩人選（1）』岩波書店、2004 年。
柴田元幸「ポール・オースター全作品解説」『MONKEY』（柴田元幸責任編集）第 35 巻、スイッチ・パブリッシング、2025 年 2 月 15 日、pp.124-146。
柴田元幸、藤井光「オースターを／とともに読む」『ユリイカ』第 56 巻、第 10 号、2024 年 8 月、pp.59-72。
「対談＝柴田元幸×大宮勘一郎　生が赦され祝福される物語の力－追悼ポール・オースター」『週刊読書人』2024 年 6 月 14 日、pp.1-2。
中村瑞樹「円環の先の希望－Paul Auster の *Sunset Park* におけるポスト 9/11 の野球表象」『英文学研究支部統合号』第 16 号（『関西英文学研究』第 17 号）、2024 年、pp.193-200。
山本裕子『フォークナーの晩年様式（レイト・スタイル）－その展開と変容』松籟社、2023 年。